



イギリスの再始動 ロンドンオフィスからの緊急レポート

5月17日。イギリスに生活する者にとって待ちに待った日です。正月明け以来かれこれ4か月以上も続いていた3回目のロックダウンが段階的に緩和され、この日いよいよレストラン店内での飲食が解禁されるのです。日本におられる皆さんは想像できるでしょうか。長期にわたって必需品以外のお店が閉店し、レストランも居酒屋もやっていない、電車やバスも自由に乗れない、具合が悪くなくても医者には診てもらえない外国での生活。最も厳しい時期には一日一度の散歩のみ外出を許される状態でした。毎日救急車のサイレンが街中に鳴り響き、何万人も新規感染し、数百人から千人以上がたった1日で亡くなっていきました。ほとんどのサラリーマンは昨年3月から1年以上も在宅勤務を余儀なくされています。



突如あちこちに現れた自転車専用道、その名も“Covid-19 pop-up cycle lane”

私の勤務する法律事務所は多くの企業の代理人業務を受任していますので、郵便物の確

認のために交代制で出勤していますが、電車もバスも利用できないので私は自宅から毎日往復で30キロを自転車で移動します。イギリスはこの機会に脱炭素社会を目指すことを見据えて自転車利用を奨励し、そのために特別予算を組んで主要ルートに自動車専用道や自転車用信号を整備しました。ヘルメットをかぶったサイクリストが増えたのは大きな変化でしょうね。6月下旬に予定されている行動規制全面解除後も自転車通勤する人はそのまま続けるかもしれません。



店内飲食解禁までは店前のスペースに強引に席を設けて営業する店も

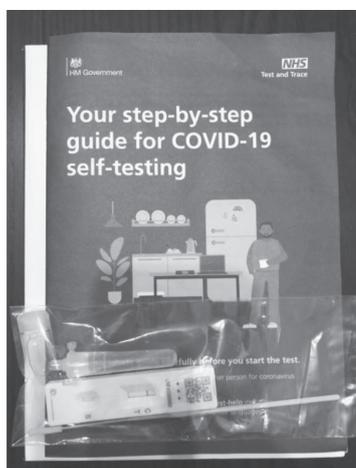
在宅勤務へのシフトは比較的スムーズに行われたと思います。もともと26週間以上勤務した従業員にはフレックス勤務を要望する法的権利があり、雇用者側にはこれを検討する義務があります。コロナ以前にすでに多様な働き方を受け入れる土壌が定着していましたので大きな混乱はなかったと思います。

潮目が変わったのはやはりワクチンだった

と思います。イギリスでは今年5月20日時点で成人の70%に対して1回目のワクチン接種が終わり、2回目が終わった人も40%に達しています。感染による重症化リスク等の要因から優先順位をつけ、医療従事者、老人ホーム職員、重篤な基礎疾患患者、高齢者から順に接種を進めています。



ワクチン接種後に渡されるカード。接種を受けた証拠にハート形のかわいいシールがもらえる



迅速抗原検査キット。登録すると無料で一度に7日間分もらえる。自宅で検査し30分以内に結果が出る。ロックダウン、ワクチンと併せて再始動の決め手になるか？

80歳以上から始まった接種対象年齢も37歳以上までおりました。かかりつけ医、薬局、巨大なイベントホールなどありとあらゆる

場所を利用し、ボランティアも活用しています。当たり前のことですが、ワクチンだけでなく最前線に立つ医療従事者は何事にも最優先です。全国的に学校が閉鎖されていた時も、医療従事者にはフルで働いていただかなくては困りますので、医療関係者の子女だけは優先的に学校で受け入れていました。医療従事者の子女が学校で差別や不利益を受けるというような事態は、ここでは想像できないと思います。

英国には、日本でいうところの、国民健康保険制度がありません。医療は、National Health Service (NHS) により、すべての者に対し、英国民、外国人、老若男女、貧富の差を問わず、全て無料で提供されています。理念は大変すばらしそうに見えますが、現実には、大きく異なり、だれもが医療を受けられるということは、だれもがまともな医療をタイムリーには受けられない、ということの意味しています。医療のキャパシティーにも限界があり、限りある資源を用いて無料の医療提供を理念とする制度を維持してきたイギリスでは、その制度の維持には、国民全員の理解と協力が必要であることが大前提となっています。ジョンソン首相や政府高官が繰り返し国民向けに、Stay homeとともにProtect NHSという表現で訴えていました。

ブレクジットに伴う混乱もコロナ禍の大波に隠れてしまった感もあります。6月末には行動規制が全面解禁される予定です。経済予測も上振れ修正されました。10数万人がコロナで亡くなるなど散々な目に遭いましたが、いよいよイギリスは再始動しそうです。

筆者紹介

絹川 健一

91年司法試験、元検事、08年弁護士登録、13年英国法弁護士（ソリシタ）登録 専門分野 国際法務、海外コンプライアンス 趣味やモットー等 ロンドンで干物づくりとクラフトジン